

氏名	藤本 憲正
授与した学位	博士
専攻分野の名称	保健福祉学
学位授与番号	博甲第105号
学位授与の日付	平成28年3月24日
学位論文の題目	語用論的コミュニケーション障害の評価法の開発
学位審査委員会	主査 中村 光 副査 高橋 徹 副査 川上貴代 副査 中村孝文 副査 佐藤和順

## 学位論文内容の要旨

第1章では、研究背景を述べた。右大脳半球損傷、外傷性脳損傷、変性性認知症などによってしばしば、失語症とは異なるコミュニケーション障害が起こることが知られている。これらでは、音韻・語彙・統語機能といった言語の形式的（機能的）な側面は保たれているが、語用論（pragmatics）の問題のため、まとまりのない脱線した発話、状況に合わせて会話することの困難さなどの特有のコミュニケーション障害を示す。この語用論的コミュニケーション障害については、日本において確立された評価の方法はなく、そのため介入の技法も未開発である。そこで今回、語用論的コミュニケーション障害の評価法（観察式と検査式）を開発した。

第2章では、観察式の語用論的コミュニケーション評価法として日本語版 Pragmatic Rating Scale (PRS) を作成し、その信頼性を検証した。＜方法＞欧米の語用論的コミュニケーション評価尺度をできるだけ多く取り寄せ、慎重に内容を吟味した。そして MacLennan ら (2002) の Pragmatic Rating Scale を選定し、翻訳・逆翻訳と内容の修正を経て日本語版（試案）を作成した。次に、信頼性の検証のため、脳損傷により語用論的コミュニケーション障害の特徴を呈した 24 例（51~79 歳）のコミュニケーション行動を録画した VTR を作成し、言語聴覚士 3 名に、それを再生しながら日本語版 PRS を用いて評定するよう求めた。評定者 2 名を 1 組とした合計 3 組の組み合わせにおける評定の単純一致率と weighted  $\kappa$  係数を算出した。＜結果＞評定者間信頼性については、日本語版 PRS の下位項目全体の単純一致率は平均 0.87、weighted  $\kappa$  は平均 0.66 であった。評定者内信頼性については、下位項目全体の単純一致率は平均 0.96、weighted  $\kappa$  は算出不能の 1 項目を除き平均 0.83 であった。＜考察＞日本語版 PRS は十分な評定者間信頼性、評定者内信頼性を備え、臨床で有用な評価法である可能性が高いと考えた。

第3章では、日本語版 PRS の妥当性について検証した。＜方法＞対象は、コミュニケーション障害を認めない右半球損傷者（右なし群）（54~74 歳）、およびコミュニケーション障害を認める右半球損傷者（右あり群）（48~79 歳）それぞれ 15 例。コミュニケー

ション行動を日本語版 PRS を用いて評定するとともに、言語機能の形式的側面を測定する検査であるトークンテスト (TT)、および言語機能に加え遂行機能を反映する検査である文字流暢性課題 (LFT) を実施した。日本語版 PRS 総得点を従属変数として U 検定を行い、PRS 総得点と TT 得点、LFT 得点のそれぞれについて Spearman の順位相関係数を求めた。〈結果〉右なし群と右あり群間の得点差は有意であった。相関係数は LFT 得点との間のみ有意であった。〈考察〉日本語版 PRS は、その成績によってコミュニケーション障害の有無を鑑別でき、その成績は言語の形式的側面を評価する課題と関連せず運用的側面を反映する課題と関連することから、十分な判別的妥当性と基準関連妥当性を備えていると考えた。

第 4 章では、検査式の語用論的コミュニケーション評価法として、新規比喩の理解課題の有用性について検証した。語用論的コミュニケーション障害の特徴の 1 つとして暗示的意味の理解困難があげられ、欧米における語用論的コミュニケーション障害の検査バッテリーではしばしば比喩の理解課題が用いられる。しかし、なじみの高い比喩文は知識によっても正答可能で、先行研究の結果が一致しない一因と考えた。そこで、なじみの低い比喩の理解課題を作成し、その成績の特徴を分析した。〈方法〉対象は、健常高齢者 (統制群) (52~76 歳)、コミュニケーション障害を認めない右半球損傷者 (右なし群) (54~74 歳)、コミュニケーション障害を認める右半球損傷者 (右あり群) (48~79 歳)、左半球損傷による失語症者 (失語群) (43~79 歳) それぞれ 15 例。比喩文は一般的になじみの低い直喩文 30 題とし (例：道は、血管のようだ)、検者がそれを読み上げた後、その意味に最もあう文を 4 つの選択肢から選ぶよう求めた。さらに TT を実施した。比喩理解課題、TT のそれぞれについて、得点率を従属変数として Kruskal-Wallis 検定を用いて群間比較を行い、Bonferroni 法による多重比較を行った。〈結果〉統制群と比較して、右なし群は比喩理解課題、TT とともに同等の得点であり、右あり群は特に比喩理解課題で有意な低下を示した。〈考察〉なじみの低い比喩文を課題に用いることで、コミュニケーション障害なしとありの 2 群を鑑別することが出来た。新規比喩の理解課題は、語用論的コミュニケーション障害の評価に有用だと考察した。

第 5 章では、総合考察を述べた。語用論的コミュニケーション障害の評価法の開発を日本で初めて行った。障害の評価にあたっては、観察式と検査式の評価法のいずれにも一長一短があり、目的や状況によって使い分けられるべきだと考えられる。今後はこれらの評価法が活用され、語用論的コミュニケーション障害に対する理論と実践、研究と臨床の両面が進んでいくことが期待される。

### 主業績

No.1	
論文題目	脳損傷者における比喩理解－右半球損傷者における障害を中心に－
著者名	藤本憲正, 中村 光, 福永真哉, 京林由季子
発表誌名	音声言語医学, 57(2), 201-207, 2016

### 副業績

No.1	
論文題目	語用論的コミュニケーション評価尺度の開発－日本語版 Pragmatic Rating Scale の信頼性－
著者名	藤本憲正, 中村 光, 伊澤幸洋, 津田哲也, 栗林一樹
発表誌名	コミュニケーション障害学, 32(1), 11-19, 2015
No.2	
論文題目	日本語版 Pragmatic Rating Scale の妥当性と検査精度
著者名	藤本憲正, 中村 光, 清水洋子, 後藤良美, 福永真哉
発表誌名	岡山県立大学保健福祉学部紀要, 22(1), 109-114, 2015.

## 論文審査結果の要旨

本論文は、右大脳半球損傷、外傷性脳損傷、変性性認知症などによってしばしば生じる「語用論的コミュニケーション障害」、すなわち音韻・語彙・統語機能は保たれているが、ことばの運用に問題を示す障害に関し、日本で初めての定量的評価法を開発した研究をまとめたものである。

本論文では、まず観察式の語用論的コミュニケーション評価法として日本語版 Pragmatic Rating Scale (PRS) を作成し、その信頼性を検証している。米国の Pragmatic Rating Scale を基に日本語版試案を作成し、信頼性の検証のため、脳損傷によって語用論的コミュニケーション障害の特徴を呈した 24 例のコミュニケーション行動を録画した VTR を作成し、言語聴覚士 3 名に、それを再生しながら同試案を用いて評定するよう求めた。その結果、評定者間信頼性、評定者内信頼性の値は、いずれも十分に高いものであった。次に、日本語版 PRS の妥当性について検証している。コミュニケーション障害を認めない右半球損傷者（右なし群）と障害を認める右半球損傷者（右あり群）それぞれ 15 例のコミュニケーション行動を日本語版 PRS を用いて評定した。その結果、両群間の得点には有意差が認められた（判別的妥当性）。また、日本語版 PRS 得点は文字流暢性課題の得点と有意に関連し、トークンテストと関連しなかった（基準関連妥当性）。また、検査式の語用論的コミュニケーション評価法として、新規比喩の理解課題を開発している。語用論的コミュニケーション障害の特徴の 1 つに暗示的意味の理解困難があり、欧米における検査バッテリーでは比喩の理解課題が高頻度に採用されている。なじみの高い比喩文は知識によっても理解可能なので、ここではなじみの低い比喩の理解課題を作成した。対象は、健常高齢群、右なし群、右あり群それぞれ 15 例である。検者が比喩文を読み上げ、その意味に最もあう文を 4 つの選択肢から選ぶ課題において、右なし群は健常群と同等の得点であったが、右あり群では有意な低下を示した。最後に総合考察として、語用論的コミュニケーション障害の評価にあたって観察式と検査式の 2 つの評価法を開発した意義について述べている。

以上の結果より、本論文の成果は、学術上・実際上ともに保健福祉学分野の発展に寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（保健福祉学）の学位論文として価値あるものと認める。